

論文の要旨

論文題目	日本語の受身に関する習得研究 —タイ語を母語とする学習者の場合—
氏名	サウエットアイヤラム テーウィット
学位	博士 (学術)
授与年月日	平成 22 年 4 月 30 日

本研究は、形式と機能の結び付け (**Form-to-Function Mapping**) の観点からタイ語を母語とする日本語学習者における受身の習得を明らかにすることを目的とする。そのために、第 1 に、縦断的研究、横断的研究 (日本語能力の熟達度の上昇, 学習環境の異なり) の研究方法を用いて、学習者が如何にして受身の形式を機能に結び付けて使用するのかを明らかにする。第 2 に、誤用分析の観点から学習者は受身を習得する際にどのような誤用を起こしているか、日本語能力の熟達度の上昇と学習環境の異なりによって誤用がどのように変わるかを明らかにする。

目的の達成に向けて、第 2 章では本研究の理論的基盤となる中間言語理論、その中間言語に影響を与える要因、形式と機能の結び付け、誤用分析について概観した。そして、受身の習得に関する先行研究を概観し、先行研究の課題及び今後の研究に期待される改良点について述べた。これまでの受身の習得研究には、発話資料を調査した研究や、英語、中国語、韓国語以外の言語を母語とする学習者を調査した研究がほとんどないという問題がある。また、受身の機能に焦点を当て調査した研究はあるが、その多くは「被害の気持ちを表す機能」と「視点を統一する機能」のみを対象としている。さらに、各研究において考察対象とする受身の数が少ない問題もある。これらの課題を踏まえ、本研究では受身の発話資料を大量に収集できる、オーラルナレーションタスクを使用し、タイ語を母語とする学習者を対象に調査を行った。さらに、受身の他の機能にも焦点を当て、考察した。

第 3 章では、考察対象となる受身の機能について、日本語学の先行研究の記述を概観した上で、受身の機能を以下のように 4 つ分類した。

- (a) 動作対象の記述 (以下、「対象受身」とする)
- (b) 視点の統一 (以下、「視点受身」とする)
- (c) 被害, 迷惑の意味の顕在化 (以下、「被害受身」とする)
- (d) 恩恵の意味の顕在化 (以下、「恩恵受身」とする)

但し、「対象受身」、「視点受身」、「被害受身」の 3 つの機能、「対象受身」、「視点受身」、「恩恵受身」の 3 つの機能はそれぞれ常に一体化しており、独立していない。

そして、タイ語の受身の機能についても概観した。タイ語の受身標識は多様で複雑であるが、研究者全員の一致をみているのは「**thuuk**」のみである。「**thuuk**」には「被害受身」

と「対象受身」はあるが、「視点受身」と「恩恵受身」はない。タイ語では、「視点受身」と「恩恵受身」は「能動文」に訳される。

第4章では、研究方法について述べた。20コマ漫画のオーラルナレーションタスク（計3つ）を使用し受身の発話資料を収集した後、フォローアップインタビューを行い、学習者の心的態度について情報を得た。そして、学習者の発話資料に現れた「正用、非用、誤用、不要」の定義を述べ、一体化している受身の機能を1つに判定する枠組みを提示した。具体的には、「絵からの判断」と「発話からの判断」という枠組みを用いた。「絵からの判断」とは、絵の内容から受身を4つの機能の何れかに特定することを意味する。それに対し、「発話からの判断」とは、調査協力者が使用した受身の主語をはじめ、動詞、共起表現によって、受身の4つの機能の何れかに分類することを意味する。本研究ではこれらの枠組みに基づき、学習者が受身の間言語をどのように構築していくかを分析した。

第5章では、タイ語を母語とする学習者10名の発話資料を縦断的に分析し、個々の学習者における受身の使用がどのように変化するかについて考察した。1年に渡る3回（Ⅰ期からⅢ期）の調査の結果、以下のようなことが明らかになった。

(1) タイ語を母語とする学習者はⅠ期から「被害受身」を使用し、学習期間が長くなるに従いその使用が多くなった。つまり、タイ語を母語とする学習者は受身の形式を「被害」という機能に先に結びつけて使用した。次に、受身の形式を「対象」に結び付け、「視点」・「恩恵」の順に結びつけて使用したと考えられる。しかし、Ⅲ期においても「視点受身」、「恩恵受身」を使用した学習者は非常に少なかった。

(2) 受身の正用の発達過程として、最初は「能動文」が出現し、次の段階で受身を理解し、運用する。しかし、正用だけでなく、誤用も含まれる。「正用」は一時的なものであるため、正用として定着する可能性もあるが、「能動文」に戻るか、受身が使用されるが誤用になる可能性も考えられる。

(3) 受身の発達過程において、学習者全員に必ず観察される誤用がある。それは「半受動型の誤用」、「半能動型の誤用」、「活用の誤用」の3つである。これらの3つの誤用が出現した時期は学習者によって異なったが、どの学習者の発話においても必ず観察された。

(4) 3期を通して、タイ語を母語とする学習者は受身の代わりに「能動文」を使用する傾向が強く、変化がほとんどなかった。しかし、学習者の中でも、個人、受身の機能、学習期間によって差が観察できた。例えば、Ⅰ期において「被害受身」の代わりに「てしまう」を使用した学習者がいた。また、3期を通して「視点受身」の代わりに「授受表現」を使用した学習者がいた。

第6章では、タイ語を母語とする学習者66名（下位群、中位群、上位群各グループ22名）の発話資料を横断的に分析し、学習者の日本語能力の上昇が受身の使用にどのような影響を与えるかについて考察した。また、学習者の発話資料と日本語母語話者22名の発話資料を比較し考察した。その結果、以下のようなことが明らかになった。

(1) タイ語を母語とする学習者は、下位群のレベルから受身の形式を「被害」という機

能に結び付ける傾向が非常に強かった。そして、熟達度が上がると、受身の形式を「恩恵」という機能にも結び付けた。

(2) 学習者は受身の形式を「被害」という機能に結び付ける傾向が強いのは、「母語による影響」をはじめ、「受身に対する認識」や「その言語形式でしか表せないものの方が、他の言語形式が可能なものより使用率が高い」ということによる。また、本研究では「教材による影響」もあるという可能性を示唆した。

(3) 学習者は上位群になっても下位群・中位群との間に「対象受身」と「視点受身」の使用の差がなかった。しかし、「対象受身」は下位群のレベルから使用されたのに対し、「視点受身」は上位群のレベルになってもほとんど使用されなかった。

(4) 日本語母語話者は、受身の代わりに使用した文法形式が機能によって異なった。例えば、「視点受身」では「てくる」か「HP」が使用され、「恩恵受身」では「授受表現」が使用された。それに対し、タイ語を母語とする学習者はレベルを問わずどの機能においても「能動文」を使用する傾向が強かった。しかし、「被害受身」の代わりに「てしまう」、「授受表現」を使用した学習者や、「視点受身」の代わりに「授受表現」を使用した学習者がいた。

第7章では、日本に留学したことがないタイ語を母語とする学習者上位群22名（以下、JFL上）と日本に10ヶ月から1年位留学し、調査時点では日本から帰国し、3ヶ月から5ヶ月程度経ったタイ語を母語とする学習者上位群22名（以下、JSL）の発話資料を横断的に分析し、第二言語という学習環境が受身の使用にどのように影響を与えるかについて考察した。また、学習者の発話資料と日本語母語話者22名の発話資料を比較し考察した。その結果、以下のようなことが明らかになった。

(1) どの受身の機能においてもJSLはJFL上より受身を多く使用した。しかし、2グループの間に有意差が見られたのは、「視点受身」のみである。つまり、第二言語という学習環境は、「視点受身」の習得にのみ影響を与えたということである。

(2) JSLが受身の形式を「視点」という機能に結び付けたのは、「インプットの影響」と「インターアクション、アウトプットの影響」による可能性が高い。

(3) 「恩恵受身」の代わりに使用された形式では、JSLは「授受表現」を多く使用するのに対し、JFL上は「能動文」を最も多く使用する傾向があった。第二言語という学習環境は「恩恵受身」の代わりに使用した形式にも影響を与えた。

第8章では、第6章と第7章の対象者の発話資料を誤用分析の観点から分析し、日本語能力の上昇及び学習者環境の異なりが受身の誤用にどのように影響を与えるかを考察した。その結果、以下のようなことが明らかになった。

(1) 日本語能力が上昇すると、ほとんどの誤用が少なくなった。また、JSLは誤用が特に少なかった。つまり、日本語能力の上昇及び第二言語という学習環境が誤用の出現に影響を与えたということである。

(2) 本研究の結果を先行研究で明らかにされていることと総括することにより、「半受

動型の誤用」はタイ語が格助詞を持たない言語であるために生じる誤用であるのに対し、「半能動型の誤用」は中間言語として普遍的に見られる誤用であることが判明した。

(3) タイ語を母語とする学習者は5段動詞の受身形と「～レル」を間違え使用した。受身の活用の難しさを回避するため、学習者は「レル」のみを受身の形式として使用したと考えられる。つまり、受身の活用形式の中間言語として、学習者は「～(-a)レル」を「～レル」に簡略化したと考えられる。

(4) タイ語を母語とする学習者は「不要の受身」を起こした際、規則なく自由にすべての動詞を受身にしたのではなく、自らが行為を受けているという意味が強く含まれる文に限って、受身を過剰一般化しようとした。また、本研究で観察された「不要の受身」は先行研究が述べた「母語による影響」ではなく、母語にもある受身の機能の概念を一般化したことによる。

最終章となる第9章では、第5章、第6章、第7章、第8章までの内容をもとに、明らかになったことをまとめ、そして、今後の課題について記述した。

本研究は、以上のように受身の習得について新しい知見を貢献することができただけではなく、新たな見解の可能性について試み、先行研究の結果を検証した。今後、これらの成果をタイでの日本語教育現場に如何にして活かすかについて考えたい。また、タイ語を母語とする学習者だけではなく、海外で日本語を学習している他の言語を母語とする学習者にも焦点を当て調査を行いたい。